

# 土方巽の舞踏と文体

稲田奈緒美

## <研究方法・目的>

暗黒舞踏の創始者、土方巽（1928～1986）が執筆した文章についての言説は、専ら言葉や文章の一部分からキーワードを恣意的に抽出し、メタファーとして意味解釈をするものが多い。これは舞踏作品の中から身体の動きを抽出して解釈してきた、従来の舞踏言説と大差ない。その多くは、土方の舞踏の1960年代と70年代の差異を、日本回帰に収斂させる本質主義的、日本—西洋、近代—前近代などの二項対立的に解釈する言説である。本稿では、言葉や文章の意味解釈だけでなく、文体に着目して分析することで、60年代と70年代の違いを明らかにし、さらに同時代の舞踏作品との照応関係を考察する。そこから導かれる特徴と、時代ごとの差異によって、従来とは異なる土方巽像、舞踏論を描くことが、目的である。

研究対象には、60年代の舞踏作品から、断片的に映像が残存している『あんま—愛慾を支える劇場の話』（1963、以下『あんま』と略）、『バラ色ダンス—A LA MAISON DE M. CIVEÇAWA』（1965、以下『バラ色ダンス』と略）、同時代に土方が執筆した「中の素材／素材」と「刑務所へ」を、70年代の舞踏作品から『痲瘡譚』（1972、『四季のための二十七晩』より）と、70年代後半に執筆された『病める舞姫』を選ぶ。

## <研究結果・考察>

### (1) 60年代の文体と舞踏作品

「中の素材／素材」では、反社会的、反道徳的な意味の言葉を偽悪的、挑発的に多用して、従来の舞踏を否定し「〇〇ダンス」を標榜する。既存のダンスの枠組に留まりつつ、観念的、象徴的にアンチな意味を付与したダンスを指向している。

「刑務所へ」は、対象が観念的に拡大し、二項図式が明確になり、論理的。両者ともリズムの変調、論理の飛躍が所々にあるが、文の連辞関係はほぼ守られ、線状的に進行している。

『あんま』『バラ色ダンス』では、前衛美術家、音楽家らとのコラボレーションにより、構成要素を混沌、拮抗させることで、作品としての全体性を解体。動きには、バレエ、モダンダンスの様式の破壊、日常的な動きの反復、運動性の顕示がみられる。この手法は、ポスト・モダンダンスと類似しているが、土方は動きの抽象性、純粋性へは向かわず、むしろ、反様式性、反道徳性、反社会性という意味を過剰に担わせた。一方、最もその

意味が強い男色を表現する際には、動きは抽象化、様式化され、形式に捻れが生じている。

60年代の文章と舞踏は、個々の言葉、構成要素、動きに、従来のダンスに対する、アンチテーゼとしての意味を過剰に担わせたという点で一致している。多くの言葉の意味は観念的、抽象的であり、二項図式に回収されやすい。文章の形式は一般的、むしろ論理的である。結果として舞踏も文章も、意味作用においては前衛であったが、形式としては、ジャンルの枠組に留まりながらの否定、逸脱であったと考察される。

### (2) 70年代の文体と舞踏作品

70年代の文章である『病める舞姫』は、記憶の中の物や出来事との身体的な関わり（述語）が多く連ねられており、時空を超えた諸感覚によって文章が進行、飛躍する。時間軸に沿って進行し、主語によって統合される文章でも、空間軸の広がりを述語によって統合する文章でもない。統合する主語／主体がなく、その実体としての身体も確定し得ない。細分化された感覚があるだけの、おぼろげで儂げで、全体のゲシュタルトが掴みにくい、からだがあるだけである。これを、‘感覚軸による統合／非統合’と名づけたい。テキスト上は統合されないが、感覚によって統合されているからだである。

『痲瘡譚』での土方はソロ部分で、身体の各部分を互いに関連のないまま、かつ同時に、極めて遅い速度で動かしているため、複数の系が生じて優先的な焦点が結ばず、ひとつの全体性のある形、意味として、観客は認識できない。衣装、美術は男女の性、生と死を多層的に提示し、表層を攪乱する。確固とした主体のもとに統合されない、身体の細分化された感覚があるだけの、おぼろげで儂げなからだである。これは、意味を提示するのではなく、‘形式において呈示’された、感覚軸によって統合／非統合されたからだである。

但し、弟子たちは堅固な空間構成、作品構成に寄与している。このようなからだと動きは、土方以外には困難であったためと推察できる。

## <結論>

60年代の土方の試みは、反ダンスとして、またそれまでダンスの媒体であった身体そのものを呈示するという方法において、モダニズム、前衛としての衝撃力はあったが、既存の枠組に留まった。しかし、70年代には、自明の、統一された主体、身体とは異なる、おぼろげで固定されないからだを、舞踏と文章の意味作用としてではなく、‘形式において呈示’した。これは、既存の枠組をこえてた、まったく独自のからだ、舞踏であり、その革新性は意味作用のように時代による変化、風化を受けることなく続いている。